令和４年度　三木市特定教育・保育施設評価　目標達成計画

（園所名）　三木市立志染保育所

観点	②異年齢集団での遊びや生活を通して社会性を培う教育・保育

項目	内　　容
園の現状や取組、課題	○ コロナ以前には、「わくわくデー」と称して、異年齢（2～5歳児対象）の縦割グループでの生活を、1年に3回実施していた。しかしながら、コロナ禍以降、　感染防止対策として、積極的にクラスを越えた交流をもつことが厳しい状況が続いた。このような状況が、長期に及ぶ中で、かかわる機会が減少し、子どもたちの異年齢でのかかわり方が、どう接していいのか分からなかったり、関心が薄かったりという現状が見られる。 ○ 子どもたちにとって必要な体験として、リスクを少なくしながら異年齢交流ができる在り方を職員間で話し合い、計画・実践することにした。以前の「わくわくデー」の課題として、保育者が意図したグループ分けを行い交流を行ったが、負担となった子もいたのでは、との反省もあり、今年度は、子どもたちがより自然な形で異年齢交流ができるようにし、場や日時、環境を設定しながら、クラスを越えた子ども同士のかかわりの中で、一人一人の良さを認め合っていけるようにしたいと考えた。
目標	○ 保育者やクラスの友だち、異年齢の友だちと遊ぶことを楽しみ、主体的に遊びこむことで充実感・達成感を味わう。 ○ 自分の思いや考えをのびのび表現し合う中で、友だちの思いや考えに気づき、思いやりの気持ちをもつ。 ○ 周りの大人や友だちに、ありのままを認めてもらうことで、自己肯定感を育む。 ○ 異年齢児とのかかわりの中で、自分の役割を感じたり、相手を思いやる気持ち、感謝や憧れの気持ちをもてるようにする。
目標達成に向けた具体的な取組内容	○ 異年齢で触れ合えるよう、朝夕の自由あそびの内容や環境設定の工夫を行う。 ・ 遊ぶ時間を十分に確保し、乳児と幼児の遊び時間が重なる時間を意識して取り入れる。 ・ 自分の好きな遊びを見つけたり、子どもの「やりたい」が実現できたりするように環境を整える。また、子どもたちの遊びの興味や様子を職員間で話し合い、共通理解を図る。 ○ 様々な行事等の中で、異年齢でのかかわりを意図した遊びの工夫を行う。 ・ 夏の水遊びコーナーの環境作り ・ 夏祭りに向けての共同制作活動、お店屋さんごっこ交流 ・ 運動会遊びでの交流（交流競技・種目等の検討） ・ 秋の自然物を使った遊び「どんぐり まつり」 ○ 日常の生活の中で、交流場面を設定したり、働きかけたりする。 ・ 午睡や着替え時、クラスの掃除など、お手伝い活動を通した交流等 ・ リズム運動や体操などを年少児に教えたり、年長児に教えてもらったりする。
成果	○ 朝の自由あそびでは、自然に異年齢児が交流しながら遊べるように、遊び時間や場が共有できるよう工夫したことで、バーベキューごっこやお店屋さんごっこなどの子どもの興味にそった遊びを糸口として、クラス枠を超えた遊びへと広げ、自然な形で異年齢交流ができる場となった。 ○ 年間の行事や季節の節目の遊びとして、夏の水遊び、夏祭り、運動会、どんぐりまつりなども意図して異年齢で触れ合える環境を広げたことで、お店のことを伝えあったり、クラスの枠にこだわらず自分の「やりたい」を見つけて熱中して遊ぶ姿も見られ、お兄さんお姉さんの優しさに甘えたり、年下児に優しく接したりと、遊びの中で自然にかかわる姿が増えていった。同年齢では張り合ってしまう子も、年下、年上の子とのかかわりの中では、我慢したり、優しく接したりしようとする姿もみられた。 ○ 生活面でのお手伝い活動では、年長児が2歳児の着替えのお手伝いをした際に「僕が言ったら、してくれてん」などと喜び、自己有用感や達成感を味わう経験につながっている。また、年齢に添った環境作りにも着目した際には、3歳児の保育室のごっこ遊びで使用できるようなパーテーション制作を年長児に依頼することで、年長児も張り切って飾り付けを工夫して制作をし、3歳児も喜んで使って遊ぶ姿が見られた。 ○ 異年齢交流を保育所全体で進める上で、職員間で子どもの様子を伝え合い、担任だけでは見つけられなかった子どもの良さを見つけたり、保育支援や環境作りなど、多様な考え方・捉え方に気づくことができたことも成果である。日々の生活や遊びのなかで、より子どもたちが主体的にかかわり、自己肯定感につなげていける環境作りや保育内容の工夫を、今後もさらに積んでいきたい。
評価	異年齢交流による子ども同士の関わりが深まることによって、主体的に動く子どもを育成することができている。その中で、自己肯定感が育ち、互いを思いやったり、人のために考えたりすることが増えてきている。保育環境の改善については、以前より工夫を凝らして空間を確保したり、遊びが広がるような仕掛けがあちこちにちりばめられているが、そこが異年齢交流を通してさらに有機的につながってきたと思われる。子どもたちの多様な個性に合わせながらも、一人一人が自信をもって生活を営んでいることが感じられる。